

911.3
八
中

論

中

拾遺集千載集に入つる宗の物狂の事なきはた極の事なき
 の事なりん但是を知らず宗の定むる事とて一説より一説
 借らう九代をまゝくの名目書記ありけるは幸吟撰の理を
 後始と表載せし毛侍の言より和歌の言に及ひ能詩の言を
 三長取丸と幸吟の言向をよく詳らうむ中古より其の言
 篇人篇の論わるといふも後朝の言なきとて訓とていふ
 よもいふせよあつる事とて幸吟幸吟の言とて訓とていふ
 一と幸吟と一訓とていふ言と論とていふ言とていふ言と
 たよ古紀也之古今集も能の言用おもきこと加げ言篇
 を今以用う能の言ハイノ言なきは貞徳伝も能字も用ひり

傳りきり中幸吟増山の井も事本を傳へる事とていふ
 言の按さハ何き事も能詩院所説の按さハ能詩の言ハ和
 言の言も能字一かして言とて言易の言をいふ事
 かして言も言も能言も今言の能言も及ていふ言古近世
 先達の言の傳来も言得とて一和言より言一連言連言より
 言一能詩也と云ふ事人言の言貞徳伝も和言より言も言
 能詩ハ連言に言ひて言言も言も言も言も言も言も言も言も
 一辨一とて言ハ和言より言言も言も言も言も言も言も言も
 和言より言一能詩より言言言言言言言言言言言言言言言言
 能言人言言言言言言言言言言言言言言言言言言言言言言

拾遺集千載集に入つる家ハ物類の事なきハた極の事とす
 其のあつん但是を知らず類々定むらふとて一後より一能
 借らう九種をまゝくの名目書記にあらけるハ季吟撰ハ其の
 後端又素歌下ろ毛侍の二集より和歌の二集に及ハ能借の二集を
 互長歌丸と季吟の二集向をよみ詳らうむ中古より其の二言
 篇人篇の論あらうとも其朝ハ方の二言をこせりと訓とせらる
 ようとせらるるあるをさるる事ハ本朝のあつたことと推
 して其とく一訓とせらるる論とせらるる訓の二言ハ二言とせ
 せらるる古紀也との古今をまよ能の二言用おあるをさるる知言篇
 を今以用う能の二言ハ二言の事なきハ貞徳説ハ能字も用とす

傳くまゝ一其季吟増山の井もを事と傳へる事とす
 其の按さハ伝きまゝも其徳院所説の類もハ能借の二言ハ和
 歌の二言も其定一其の二言も其易の二言も其事
 其の二言も其定一其の二言も其易の二言も其事
 先達の句意の傳来も其傳とす一和歌の二言ハ能借の二言
 其の能借の二言も其定一其の二言も其易の二言も其事
 能借の二言も其定一其の二言も其易の二言も其事

況や後世諸君より入し人々難後より日圓の如くは海及び大
 切よと人種をまして流傳する所の所のまよふたふらふた
 さしと人種をまして流傳する所の所のまよふたふらふた
 乃を今復し加え利益を得んことを高き同様に持たぬ加ふと思
 ふなまのまのまの料を人種をまして流傳する所の所のまよふた
 此は誤社本よりおのけの流傳の百員をまして流傳する所の所のまよふた
 らんてその國の名産を返れとして上りておのけの流傳する所の所のまよふた
 志の百員をまして流傳する所の所のまよふた〇トこれにまして流傳する所の所のまよふた
 臨事のためより甲乙を一人をまして流傳する所の所のまよふた
 を流し人々皆同様の事なる苗をまして流傳する所の所のまよふた

心ゆき徳をまして流傳する所の所のまよふた
 してその門人のまよふた
 其角初く流傳する所の所のまよふた
 の相違を流傳する所の所のまよふた
 る流傳する所の所のまよふた
 くの流傳する所の所のまよふた
 是二点三點より流傳する所の所のまよふた
 以後大なる流傳する所の所のまよふた
 其角より流傳する所の所のまよふた
 傳し其角の流傳する所の所のまよふた

料を極く廉くすべし然るも徳者の事なぬ事あり志を
厚くありしはこれなりそ徳も料物の自らより極めざるぬ
とてつとれく百員限きむ十員限かたふはき御国すと料
とせしむるはこれなりそ徳の徳をけり料をき謝せ御座よ
強しむる方へ事付さきむる早劣の御住りたるは後世の徳
せし事なりしはこれなりそ徳の徳をけり人稀く
かく降りし徳をけり人稀く徳と稱し一面に徳を
はらひしはこれなりそ徳の徳をけり人稀く徳と稱し一面に徳を
その徳の徳をけり人稀く徳と稱し一面に徳を
徳をけり人稀く徳と稱し一面に徳を

善い徳も毎々とふるも入料と稱すきい徳く
加入とせ近世の悪風きく其角七母徳との一書の徳を
切達執心の人と徳を撰集む其角七母徳との一書の徳を
けり徳を撰集む其角七母徳との一書の徳を
を感し花梅集加入ありしと徳を撰集む其角七母徳との一書の徳を

法花寺門の徳

車輪下

眼人

とせしむるはこれなりそ徳の徳をけり料をき謝せ御座よ
強しむる方へ事付さきむる早劣の御住りたるは後世の徳
せし事なりしはこれなりそ徳の徳をけり人稀く
かく降りし徳をけり人稀く徳と稱し一面に徳を
はらひしはこれなりそ徳の徳をけり人稀く徳と稱し一面に徳を
その徳の徳をけり人稀く徳と稱し一面に徳を
徳をけり人稀く徳と稱し一面に徳を

西の酒を撰集む其角七母徳との一書の徳を

久しく徳を撰集む其角七母徳との一書の徳を
子葉

け一向を指の流流と云其角のつき昔と云く

流流の力なき事

此集平の入るる

流のきまおれをさしつらむ井よ武江の流土力足よさう時從
老のさしつらむさしつらむ流向あまも入流つらむと流流と人
まの流流と眼まひつらむさしつらむ加入さしつらむ昔昔流門人の撰
し集おハ和さの撰集よさしつらむさしつらむ連流よひつらむ
一朝一夕よ編集よさしつらむさしつらむさしつらむさしつらむ
後と古中古ハ連集の付方よ流つらむさしつらむさしつらむ
流つらむ連流の付合つらむさしつらむ流流の付方の流流をさしつらむ

まの集おあく勤へるの流せし流流つらむあつらむ解つらむ
其角より付方ハ流あまもさしつらむ流流よあつらむ昔昔流の付方ハ
大よまもさしつらむ流流老後の付合あつらむ流つらむさしつらむ
昔昔陶あつらむ一向流と云世昔昔流の流つらむさしつらむ流川
まつらむ付方の事さしつらむ失ひつらむさしつらむ或人の口付合ハ昔昔
より流流よあつらむ流流つらむさしつらむ流流つらむさしつらむ
ハとあつらむさしつらむ流流つらむさしつらむ流流つらむさしつらむ
あつらむ自中よさしつらむ流流つらむ其角流を面白くあつらむ
付合を流つらむ流流の境ハとつらむ其門下よ流つらむ人
さしつらむ流流のさしつらむ流流つらむ流流つらむ流流つらむ

時輩一流の當意喜辞とて事平の心成らざる付成るれ蓮華の
 比真八連佛ともあはれしことくも易ならんし一室紙の目と目の連
 系ハ他人の中より如く下名の連系ハ親類の并無とてこと
 と下佛らまじりしけ境をよしく幼女とてことくも時輩の
 門徒教多しとて佛佛と於骨碑身とて人言の適佛佛の
 古きことくも世より西遊といふべき事さめ人あはれ渠ハ句
 う下名なるゆゑ如く如くさやとおのまじり佛佛と通味なる事況
 らん人き嘲り初心をまじり及の義の事さめ人と法入
 るのくもさる後の人あつても佛佛執りしことけ合はれ句
 も自中なる如く地席人交つて事知る句は佛佛とてお探歌

此も僅く佛佛ハ歌よりしてさる後句の取捨とて素内さる
 常只利を如きハさる事の人と事如く事本も如存さると大概
 古の推量と歌後句を佛とてさる事をしつた一向歌と叶ハ寸
 初らと同一さる如く歌よりさるしとて和合ハさる佛佛
 系ハ歌後句待歌と系歌後句人名指さる事ともさる歌と後換
 俤用のさる事とて甚稀古もさるて容易と句代とて事本佛
 と事本と上中下ハ勿偏を母の意門の撰集とて事本佛
 せめく色事の系あはれもさるハ歌後句の付捨とてさるし
 一か捨のこは信従と乃ハ偏はさるて佛佛とておはた捨
 のさる事とていふなりと事と通る古人の如く向適さる人

此一執らざる人こそ後句の人の歌をたゞとるべきハさして
 く如きものをたりては後句ハ歌及ハ寸歌ありて
 後句ありと云ふは是不審の事也
 源朝臣の後句選より集せしむる事をも亦除きては後句
 許をたゞめしむおたはらむる事也
 ともまゝ一是ハ人々を以てあつた歌を降してはたはよ好士句選
 を用ひて先年芭蕉門人の本寄の人のまゝを評し終る所あり
 一く逗留中他借のまゝなりとのまゝハ芭蕉の句を解して
 是のまゝを口外にまゝしては依つて流の能士也と云ふは芭蕉の
 句解一にまゝをたゞめしむる事也

蘭の志くまらぬなるまゝ月内夜をてん

けしきハいとものよは彼まゝ人々も成りて尋る能士句
 ありて執らざる世句ハ能生涯の内に入らざるもまゝをけ
 せし文の端より本意一にまゝ一にまゝしてまゝとてか選らぬ
 ことありてあつた集よハ九日の朝治をまゝとてまゝといふまゝ
 ありて今か一にまゝをたゞめしむるは後句の能士句とて
 ともまゝをたゞめしむるは是れまゝといふ事也
 ともまゝをたゞめしむるは是れまゝといふ事也
 ともまゝをたゞめしむるは是れまゝといふ事也
 の故人に對してハ仇敵ありた極の事まゝのまゝといふ人ハあり

せしよ一句のふとむ合とて一詩句他せ八余八是は唯とてかかれ
 八詩句は格の守ふ八夫はまきあへて後世の詩句の例は折句とて
 名目ありしを格を以て二句のよみ入るまき判老のつとらうとて中七
 まで又まきを他より格せしむるまき一併勢お格日かきしつて
 といふまきを句の上よりとせし

かゝりぬも。いふたれは。は。あま。

~~~~~

如新曲を即ちとて一詩句一詩句のよみ入るまき一併とて格  
 せし例より後世の詩句のよみ入るまき初又二句のよみ入る  
 於け名目も兼てて是は八詩格の古風例もたてて格も折句詩格と

て後世の詩士も鄙なるとしてはるもよう。西はま句付もまきを判  
 老よりほつびとまき一を。或は源氏あるとまきへのまおと潤ひ教まき  
 して句の中まき一まきまた二まきまた八何まきまた八何と句のま  
 ぬみと次字をまきのあつひまき格の中まきまきまきまきまきま  
 けるまきとまきまき八格負申之ヶ格は早あかなる。取扱ゆ急ま年  
 官家より所製集まきまきまきまきまきまきまきまきまきまき  
 一まき一まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきま  
 けりまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき  
 八詩格初まきまきのまきまきまきまきまきまきまきまきまき  
 まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき

拾一の句侍の者同御心成りしより一旬の末御八徳御上越  
ふ人々後明しく後より邪偽を教ふる御上用心をば

一際江島紹巴法橋曰予ら連ふあまをら付合ふ人も御上越

て三旬目の何をもか守らる御上越御心成りしより一旬の末御上越

むしりし御心成りしより一旬の末御上越御心成りしより一旬の末御上越

よまはし一際江島紹巴法橋曰予ら連ふあまをら付合ふ人も御上越

御心成りしより一旬の末御上越御心成りしより一旬の末御上越

中より御心成りしより一旬の末御上越御心成りしより一旬の末御上越

と先御心成りしより一旬の末御上越御心成りしより一旬の末御上越

と先御心成りしより一旬の末御上越御心成りしより一旬の末御上越

よ及手大切より一旬の末御上越御心成りしより一旬の末御上越

後一園白殿秀吉の肝疑かりし紹巴法橋も官位をきりしれ

江州より御心成りしより一旬の末御上越御心成りしより一旬の末御上越

付し御心成りしより一旬の末御上越御心成りしより一旬の末御上越

よはあはれし御心成りしより一旬の末御上越御心成りしより一旬の末御上越

縁をてし御心成りしより一旬の末御上越御心成りしより一旬の末御上越

うめ御心成りしより一旬の末御上越御心成りしより一旬の末御上越

志の浦やよみし御心成りしより一旬の末御上越御心成りしより一旬の末御上越

まはしはるし御心成りしより一旬の末御上越御心成りしより一旬の末御上越

御心成りしより一旬の末御上越御心成りしより一旬の末御上越

振りの句体の名目絶つてなむしるし句のまぬハ能得ハ也  
 一人の夜明しく降り邪路ヲ致さる振工用心とて  
 一際江島紹巴法師曰予の連ふをよむ人付合ふも汝は  
 て三句目の何れも守らる不違懐りたまふしるし句の  
 むつしるしとけしるしとてあつて紹巴ハ連ふあつて織田行長  
 とまはしし是ハ太閤秀吉のうまもて恩縁との面白き次  
 のつしるしとけしるしとて衆衆の末度ハ長作りなり折  
 中ハ示されは是ハ之中守るてたまふ切の事ありは  
 とてしるしとけしるしとておろしき事ありは  
 とてしるしとけしるしとておろしき事ありは

とけくは橋を渡るそのころの事を下へてしつゝ一とらうの貞徳  
の節も夫も感せぬかまもなく一は事さう貞徳戴恩記よある  
證の事も考まらぬ

一 申書五和宗の由教訓は初らの内は往古より及らぬ教訓と  
源もつゝしつゝしつゝしつゝしつゝしつゝしつゝしつゝしつゝ  
一 人の心を………  
引ぬるは禰普運も同さう………  
………  
………  
………  
………  
………

清和 源平の事

宗祇

………  
………  
………  
………  
………  
………  
………  
………  
………  
………  
………

一 慶長の政………  
………  
………  
………  
………  
………  
………



とけくは持を愛するそのことかき下しむる一もつる貞徳  
の節か夫も感せぬめりまへ一け事之も貞徳戴恩記よもつる  
誇めまゆと考まへづ一

一申書五和宗の忠教訓は初らの因の徳をうへ及らぬ及愛教訓よ  
徳をうへしめしむるけけしむるいふまじき事あつたらん  
一人らの回しむる事人の面よりしむる事難らぬ一徳を  
引ひくはは徳徳にも回しむる事水よりのまじき事  
しむる事後ひく事新愛教訓よもつる人々も一及らぬ事  
しむる事徳をうへしめしむる事徳をうへしめしむる事

清き徳をうへしめしむる事

高きとてさきつらる葉末氏のきく小な積の持とて人々つる者には  
 細川三郎を捕とてそのまにけりえいんといふまにけりいぬのふれ  
 といふもはらふまにきつとてさきつる者方羽らねとてねらへる  
 勢よりとていぬ様とてねらひ働きの働とていぬ

一 大中後徳宣入道式部卿の實濟子の日次郎とておろそと文於基にあり

いぬ様とてねらひ働きの働とていぬ 大中後徳宣

いぬ様とてねらひ働きの働とていぬ

於基督依吟くく帝王の所子の日山といふまにけりいぬとていぬ  
 かしこくたつとてねらひ働きの働とていぬとていぬとていぬ  
 といふいぬ様とてねらひ働きの働とていぬとていぬとていぬ

女とていぬとていぬのきくはたつとていぬとていぬ

一 兼湯の昔言位官の人なりとていぬとていぬとていぬとていぬ  
 蕃以中絶してか蕃男家思の再興とていぬとていぬとていぬとていぬ  
 取捨をていぬとていぬとていぬとていぬとていぬとていぬとていぬ  
 恥思を歎いていぬとていぬとていぬとていぬとていぬとていぬとていぬ  
 危角をたてていぬとていぬとていぬとていぬとていぬとていぬとていぬ  
 うすきハ天猫蘆屋もいぬとていぬとていぬとていぬとていぬとていぬ  
 ア加きの唐おの壺たつとていぬとていぬとていぬとていぬとていぬとていぬ  
 梨焼とていぬとていぬとていぬとていぬとていぬとていぬとていぬ  
 心算かつとていぬとていぬとていぬとていぬとていぬとていぬとていぬ

正徳... 細川... 徳... 大中... 宣... 大正... 宣...

大正... 宣...

大正... 宣...

大正... 宣... 大正... 宣... 大正... 宣...

大正... 宣...

大正... 宣...

大正... 宣...

大正... 宣...

大正... 宣...

大正... 宣...

大正... 宣...





よう初て地り人をもたひけ應人よとていへりまゝの體ひさき世  
 へおとちたの早徳の者もくちけはるやうな成りまじたハ表りて  
 とまへん事ハ為時代よ初もまじり鳥合意お合まじり一向純徳り  
 或人曰近來の事も遊くあまの印板よ初もまじり成るまじりおまじり  
 わまじりあまの事も徳も流布あまの初の人こせのこまじり  
 とまじり生を終るくまじり名も香書あまの云と或人曰まじり  
 れ論におまじりまじり流布あまの徳もまじりまじり  
 まじり信もまじりまじりまじりまじりまじりまじり  
 及まじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり  
 まじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり

の二は凡ととて凡くの論書を著すは法人をたすく初まの人の  
 生るのまじり或と徳もまじりまじりまじりまじりまじり  
 よまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり  
 まじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり  
 報謝たりとて

一連言は真抄を著述せし宗長ハ遠州高田の能治の意ハ生るを得連言  
 を好む事徳の門よ入る事以後古今傳授まじりまじりまじり  
 及人こまじり対字徳門人の徳好士おまじりまじりまじり  
 てハ終るまじりまじり一統よ初まじりまじりまじり  
 中ハまじりまじりまじり一箇とてまじりまじりまじり

後土御門院奏問はる事にかゝり  
 勅は宗長  
 本院申上取扱はるるもの下の御事  
 宗長の御事なるら奉畏  
 御事申上るる事一首の御事御事

宗長  
 御事申上るる事一首の御事御事

と書付く一全禪院兼良との所執奏を以て  
 宗長の御事なるら奉畏  
 御事申上るる事一首の御事御事

一人鞠を蹴りて  
 御事申上るる事一首の御事御事

一 探歌の多句と葉と... 探歌の時の句他は... 年時對着門人... 探歌と... 探歌を撰り...

一 天正十年五月廿六日... 是秀中國... 廿七日... 園...



光秀

時を今更らば五月の事

あともあるる西場の事

あつた流きの手をせられたる 紹巴

かくて百員満座の龜山城へ帰るまじう用事なく出陣と  
て徳勢を引率して六月二日格次より去る一系所新町の  
西六角の南なる本徳寺へ押寄らるる若佐忠郷を自滅せしめ  
軍勢六員所爲二条由妙光寺をえりて丹波信忠郷を自滅せしめ  
若佐忠郷を去る一系所新町の西六角の南なる本徳寺へ押寄らるる  
若佐忠郷を去る一系所新町の西六角の南なる本徳寺へ押寄らるる  
若佐忠郷を去る一系所新町の西六角の南なる本徳寺へ押寄らるる

飛脚より来たる毛利の一族と和睦調へて六月十日に備州の徳川  
日向守光秀を一族より去る一系所新町の西六角の南なる本徳寺へ  
飛脚より来たる毛利の一族と和睦調へて六月十日に備州の徳川  
日向守光秀を一族より去る一系所新町の西六角の南なる本徳寺へ  
飛脚より来たる毛利の一族と和睦調へて六月十日に備州の徳川  
日向守光秀を一族より去る一系所新町の西六角の南なる本徳寺へ  
飛脚より来たる毛利の一族と和睦調へて六月十日に備州の徳川  
日向守光秀を一族より去る一系所新町の西六角の南なる本徳寺へ  
飛脚より来たる毛利の一族と和睦調へて六月十日に備州の徳川  
日向守光秀を一族より去る一系所新町の西六角の南なる本徳寺へ

一 淨瑠璃を好む人曰 鑑曲なる人其の整ふ鑑のつくも  
 淨瑠璃の卑き鑑の格よき人其の淨なるの鑑觸ハ鐵同然  
 吾等の浄徳等小聖のあたりの女初々年丸志あり其  
 時三州矣其の長老のまゝに鑑留し其女淨瑠璃水ある家  
 通をけ淨瑠璃水ある事師如事のハる丸十二計よはく十二  
 後ハ書きたる丸よ淨なることハ師をける記事古人の御も  
 ようとまゝにたする鑑淨瑠璃もに依る御の御も  
 一 浄瑠璃の格よき人曰 鑑曲なる人其の整ふ鑑のつくも

一 浄瑠璃を好む人曰 鑑曲なる人其の整ふ鑑のつくも  
 淨瑠璃の卑き鑑の格よき人其の淨なるの鑑觸ハ鐵同然  
 吾等の浄徳等小聖のあたりの女初々年丸志あり其  
 時三州矣其の長老のまゝに鑑留し其女淨瑠璃水ある家  
 通をけ淨瑠璃水ある事師如事のハる丸十二計よはく十二  
 後ハ書きたる丸よ淨なることハ師をける記事古人の御も  
 ようとまゝにたする鑑淨瑠璃もに依る御の御も  
 一 浄瑠璃の格よき人曰 鑑曲なる人其の整ふ鑑のつくも



の書をあせしむるに付合意を爲すを撰より撰修は周を撰むといふに  
 かく初らるる所の撰書著述してきく例をきき入るる系の方法  
 を勅らるるに合意考らるる著記と考せらるる考らるる考徳園の御の  
 時評と撰り撰書をあせり初らの撰書に傳授せらるる歌号能  
 引らるる初らるる撰書に信をたつる考徳園の書林見  
 たり下板より初らるる撰書の二文録といふも考らるる考徳園の英雄人  
 を歌くならるる

一 西島の撰書なるを古くして撰書の内撰人三千二人いた  
 存を撰らるる中より

合意を撰らるる撰書

今徳

とあり此書向ハ之和帝の撰書向少く撰書より考らるる撰書  
 今徳ハ長十八年の撰書向少く撰書二年の撰書と考らるる撰書  
 就ハ撰書向少く撰書向少く撰書向少く撰書向少く撰書向少く撰書  
 又二十六人の内

松濟

松濟

とあり此書向少く撰書向少く撰書向少く撰書向少く撰書向少く撰書  
 撰書の撰書向少く撰書向少く撰書向少く撰書向少く撰書向少く撰書  
 うけ撰書向少く撰書向少く撰書向少く撰書向少く撰書向少く撰書

時著先年洛下河京と居の時端午よ

素戔嗚の意中をくく職うる 洛々

と為る句は〜〜同午端午よ〜〜遠くを感得の意に  
いへる能く句は〜〜執らふ事〜入る事〜一時は佳境よ  
〜事〜終〜〜

一 馬を成をよ水を成をよ〜〜事〜を後〜〜後形を  
〜〜事〜ありけ馬法も〜〜誠を〜〜初らの事水  
意の候法を〜〜事〜を後〜〜事〜を後〜〜事〜  
よ拙く〜〜馬法の攻牙を〜〜事〜は〜成就は〜〜能得も  
〜の〜初らの〜〜法を〜〜句は〜句は〜句は〜

中〜〜事〜の〜事〜の〜事〜

一 初まの時〜〜事〜の〜事〜の〜事〜  
の〜事〜を〜〜事〜の〜事〜の〜事〜  
〜二向〜人〜事〜の〜事〜の〜事〜  
句の〜事〜の〜事〜の〜事〜  
〜事〜の〜事〜の〜事〜  
の〜事〜の〜事〜の〜事〜  
〜事〜の〜事〜の〜事〜  
〜事〜の〜事〜の〜事〜  
〜事〜の〜事〜の〜事〜  
〜事〜の〜事〜の〜事〜  
〜事〜の〜事〜の〜事〜  
〜事〜の〜事〜の〜事〜

非論一

〇三三

詮自己の稽古ハ後よりしてせしめたる射場ハ射を以て中心に  
射するに多しは射を専らしてまよふ事なくして射を以て中心に  
入る九指本も射するに多しは射を専らして射を以て中心に  
て百幸う得るに射を以て中心にして射を以て中心にして射を  
めく此語又ハ此語の如く射を以て中心にして射を以て中心に  
少く其意を以て射を以て中心にして射を以て中心にして射を  
是れを以て中心にして射を以て中心にして射を以て中心にして射を  
宜なる事なりと射の功を以て中心にして射を以て中心にして射を  
なるに射を以て中心にして射を以て中心にして射を以て中心にして射を

一 此語を以て中心にして射を以て中心にして射を以て中心にして射を

人殊之紹語也世に其人ハ此語を以て中心にして射を以て中心に  
用ゆ信者ハ此語の如く射を以て中心にして射を以て中心にして射を  
此語を以て中心にして射を以て中心にして射を以て中心にして射を  
抛入る者同ら中古より射を以て中心にして射を以て中心にして射を  
高射の事なりハ此語の如く射を以て中心にして射を以て中心にして射を  
末治より先年京師池坊を以て中心にして射を以て中心にして射を  
ありしに以て射場を以て中心にして射を以て中心にして射を以て中心に  
位高射の如く法園を以て中心にして射を以て中心にして射を以て中心に  
射を以て中心にして射を以て中心にして射を以て中心にして射を以て中心に  
しよ一因以て世俗を以て中心にして射を以て中心にして射を以て中心に

さくらん木本あつて... 予の親... 是を論... 一復依... 是を論... 一... 予の親... 是を論... 一復依... 是を論... 一...

上る端... 月の言... 志

法... 予... 孫... 上も糖... 樹... 鬼貫

樹も似... 鬼貫

おも... 鬼貫

山... 志

け... 予... 是... 一... 予... 是... 一...





一 此書一対の筆に於ては、筆姿人の顔の如く、筆の如く、  
 と書く。一と字、回を十倍の便を以て、求りて、此處の他配  
 感とたえらう。一と字、回を十倍の便を以て、求りて、此處の他配  
 は、可きものと、留むるなり。

一 此書一対の筆に於ては、筆姿人の顔の如く、筆の如く、  
 と書く。一と字、回を十倍の便を以て、求りて、此處の他配

一 此書一対の筆に於ては、筆姿人の顔の如く、筆の如く、  
 と書く。一と字、回を十倍の便を以て、求りて、此處の他配  
 感とたえらう。一と字、回を十倍の便を以て、求りて、此處の他配  
 は、可きものと、留むるなり。

此書一対の筆に於ては、筆姿人の顔の如く、筆の如く、  
 と書く。一と字、回を十倍の便を以て、求りて、此處の他配

秋、と月

此書一対の筆に於ては、筆姿人の顔の如く、筆の如く、  
 と書く。一と字、回を十倍の便を以て、求りて、此處の他配

秋、と月

一 此書一対の筆に於ては、筆姿人の顔の如く、筆の如く、  
 と書く。一と字、回を十倍の便を以て、求りて、此處の他配

一 此書一対の筆に於ては、筆姿人の顔の如く、筆の如く、  
 と書く。一と字、回を十倍の便を以て、求りて、此處の他配

一 此書一対の筆に於ては、筆姿人の顔の如く、筆の如く、  
 と書く。一と字、回を十倍の便を以て、求りて、此處の他配

一 此書一対の筆に於ては、筆姿人の顔の如く、筆の如く、  
 と書く。一と字、回を十倍の便を以て、求りて、此處の他配

一 此書一対の筆に於ては、筆姿人の顔の如く、筆の如く、  
 と書く。一と字、回を十倍の便を以て、求りて、此處の他配

用と枝と... 河州島の瀬... 波あり... 舟の... 乃を操り...  
... 甘き魚... 舟の... 舟の... 舟の... 舟の...  
... 明鏡... 舟の... 舟の... 舟の... 舟の...  
... あくく... 舟の... 舟の... 舟の... 舟の...



詠諧卷之二終

